



INGING MOTORSPORT



INGING MOTORSPORT OFFICIAL WEBSITE OF PAPER [http://www.inging.co.jp]

INGING NEWS PAPER 2014 VOL.04

**TAKE
FREE**
無料



Congratulations!

3位表彰台&上位入賞!!

この勢いを継続して、次のレースは2台揃って表彰台を目指す

Race Report

Round.3 FUJI SPEEDWAY
7/13 Final

決勝 2014年7月13日 富士スピードウェイ



SUPER FORMULA TWIN RING MOTEGI 8/23-8/24

Support by cyber net

INGING NEWS PAPER VOL.04 [インギング ニュースペーパー]

2014年08月発行 通巻4号 発行：株式会社サイバーネット 西日本営業部 〒506-0011 大分県大分市京浜区鹿島中1-12-5 藤波直樹TEL:0975-211111

Race Report 決勝 2014年7月13日 富士スピードウェイ
Round.3 FUJII SPEEDWAY 7/13 Final 実測:豊りの名門 | コース設定:ドライ・ウェット
 250.965 km (4.563 km x 55 Laps)



Congratulations!

3位表彰台&上位入賞!!

この勢いを継続して、次のレースは2台揃って表彰台を目指す

シリーズ第2戦に引き続き、富士スピードウェイを舞台に戦われたSUPER FORMULAのシリーズ第3戦。今回は通常のスタイルでレース距離も250kmとされたが、レース終盤にはわかずがコースを巡らし、またスピンでコース上に停車したマシンを回収するためにセーフティカーが導入されるなど、レース終盤はハプニングの連続となった。しかし、こうした状況の中、P.MU / CERUMO-INGINGの2台をドライブする石浦宏明と国本雄資、2人のドライバーは安定したペースで走るとともに、チームが的確な判断でタイヤ交換を実施、8番手グリッドからスタートした国本が今季初となる3位表彰台を獲得、5番手グリッドから優勝の期待も高かった石浦は、思わぬマシントラブルに見舞われたものの4位に陥入り、2台揃って上位入賞を果たすことになった。

前日まで続けて、雨が激しく降り、気温も低下し、朝一番で行われたフリー走行はセッション開始時点で気温が24℃、路面温度が29℃でドライコンディション。結果的には石浦が5番手、国本が12番手のタイムをマークした。石浦は、予選に特化した仕様から、前日、シリーズ第2戦のレース2でテストして好感触を得たセットをベースにした決勝仕様を確認。一方の国本は、予選で倍まされたトラプルが完全に克服されていくかの確認。2人とも大きなダメージを食っていたフリー走行だったが、ともに好感触を得たようだ。ポテンシャルはともかく、タイム的にはトップとは差違で、午後の決勝に向けて一層期待の高まるセッションとなったが、最終にトラブルで停車したマシンから出発するハプニングもあって、セッションは残り数分のところで赤旗中断からそのまますま終了。予定されていたスタート練習もキャンセルされてしまったが、これは、この日のレースの終盤を予告していたのかもしれない。

決勝レースは午後2時から、だがその1時間前には小雨が路面を濡らすことになった。これは文字通りの「通り雨」で、決勝がスタートするまでは乾いてしまし、実際、全車ドライタイヤで決勝レースをスタートしている。ちなみに、スタート時のコンディションは、セクター3に少し濡れた部分があったが基本的にはドライ、気温と路面温度は、それぞれ22℃と26℃だった。スタートから一つだけポジションダウンしてオープニングラップを終えた石浦は21周目にオーバーハブで壊れた中輪一軸を交換し、14位の5番手に戻ったが、そこから先はレースが膠着、かつセッションをキープしたまま周回を続けることになる。一方、8番手のグリッドからスタートした国本は、11番手でポジションを下げてオープニングラップを終えたが、3周目に9番手に復帰すると、そこから山本尚貴選手と相手に位争いのバトルを繰り返すことになった。続くバトルは、21周目に入ったストリートエンドで、国本が山本選手をパスして決着。これで国本はポイント圏内へと復帰した。継続していた上雨争いで、最初に動いたのは石浦だった。21周を終えた時点で1レースのピットストップ、カワリラップ補給とタイヤ交換を行い、最も早くピットを後にした石浦だった。結果、ルーティンピットインを終えてみると、上位陣のオーダーに大きな変化はなく、石浦、石浦、石浦と前年と同様選手で走行していた。

2014年Round3 決勝 そんなレースが大きく動いたのは43周目。大粒の雨が激しく降り、コースは一気にウェットコンディションに変わっていった。最初にタイヤ交換を行ったのは石浦。45周を終えたところでピットに向かいレインタイヤに交換する。これで石浦は9番手まで後退したが、雨が強くはなれば一気に順位に立ちはだかる。チームの誰もがそう思ったが、雨が本場にならなくなったのはそれから2〜3周後。トップを快走していたジョウワオ・ハオロ・デ・シリベイ選手も雨に足すすわれたかへアサインを流してコース上にストップ。これでセーフティカー(SF)がコースインするが、チームをそのタイミングで、今度は国本がピットインしてタイヤを交換した。これはまさにそのタイミングで、結果的に国本はこれで3番手に進出することになった。一方、石浦は、SFが目の前でコースインし、しばらくは遅いスピードで周回することを余儀なくされてしまい、その後でタイヤ交換した中輪一軸選手と平川亮選手、そしてチームメイトの国本にも先行を許してしまうことになった。結果はレインコンディションが長くなり、ドライタイヤでスタートしたドライバーは大きくポジションダウン。中輪選手、平川選手に続いて国本が3〜4位でチェックカー。チームが期待していたシムンとは少し違っていたが、2人揃って上位入賞を果たすことになった。不安なハプニングや予選時めトラブル、本来なら勝っていたレースを失ったことには悔しいながらも、見方を換えれば、それでも3〜4位入賞できるほどマンツールのポテンシャルは高まっているのも事実。立川拓監督は、次のレース(8月2日決勝)の「レース第2戦」では「もう一つ」を掴みたいとコメントしているが、それが実現する可能性は高い。次戦に期待が高まっている。



Driver Number
38
石浦 宏明

「スタートの混戦が落ち着いたところで番手に着けていきましたが、上位の5〜6台は似たようなペースで、空が狭くなって、雨も降りそう。ピットと相談してレインタイヤに替えることになったのですが、ちょうどそのタイミングでマシンにトラブルが押し寄せました。直進してもステアリングを切った瞬間のままで、トラブルの原因もまだ状況も出ななくて...ピットと相談して、心配だから無理しないよう質をつけていたんですが、ペースには充分でした。でもSFがちょうど目の前でコースインしてしまい、結果的にそれで遅れてるレースを失ってしまいました。もちろん悔しいけれども、トラブルを抱えた状況だったので4位入賞できたのも事実。マンツールのパフォーマンスが高まっているのも事実。この監督がレースを期待していたらさっさと勝つことができる、そう思っています!」

Driver Number
39
国本 雄資

「予選でのトラブルは、チームが完璧に治してくれて全く問題は無かったんですが、今日は非常に苦しいレースになりました。スタート自体は悪くなかったんですが、1コーナーでイン前に飛び込んできたワルズを避けるために急なところを走ることにになり、オープニングラップで良いポジションを確保してしまいました。そこから何とかなって上げていくことはできたのですが、タイヤがクワして来るとやはり難しくなっていて、今日はもう(上位入賞の)チャンスはないだろうな。それでも番手良ければポイントをとくくらいはできるかな。くわいも思っていたんですが最後は雨が降ってきて、SFが入って、チームのタイヤ交換の判断もびびったり。最後はレインコンディションが厳格になって、かなり危険な状態だったんですが、最後まで走り続けることができて3位入賞できました。ほんと、良かったです!」

Driver Number
39
国本 雄資

「結果に雨が降ってきて、レースはドタバタした。俺、マンツールのトラブルを承ったけど結果的には3位と4位で2台揃って入賞することができて良かった。充分に前を指さるポテンシャルがあることが分かったし、チームの全員がミスすることなくレースを終えることができた。それだけ思いがたか。39周目の石浦(5番手)選手は、レース終盤にマシンにトラブルが出てしまい、我々のレースとなってしまいました。それが4位で踏みとまることができました。39周目の国本(雄資選手)も、8番手からのスタートで、序盤は少し苦しい展開になりました。結果的に俺はチームの判断が良かった。日本自身も、ミスで走ったからその表彰台に乗ることができました。クルマのポテンシャルが上がってさっさとなくチームにも良い風が吹いた。たまたま気がしますが、この調子、勢いを継続して、次のレースではもう一つ、優勝と2台揃って表彰台、を目指します!」

Team director
立川 拓